

地下一階お菓子コーナー

ひゆうが ひかげ
日向 日影

変わらないものというのは、それだけで人を安心させてくれる。最近ではレトロなものを集める人も増えているのも、そんな気持ちの影響だろうと、ゆつたりと回るキャンディやクッキーを見ながら考えていた。この量り売りのお菓子コーナーは、僕が物心ついた頃から同じ場所にある。塗装を塗り替えたり、実は新型の機械に買い換えられてはいるのかもしれないが、当時カゴをいっぱい埋めては両親に呆れられ、そのあと母親が申し訳無きような顔を店員に見せながら半分ほどを棚に戻すという出来事が何度かあったことが思い出される。

「いらつしやいませ」

カゴも持たずに様子を見る僕を冷やかしたと思っただけあるう店員が声をかける。僕は会釈しながらそこを離れ、すぐそばにあるエレベーターの上りボタンを押す。このボタン、そしてエレベーター本体も昔のままだろうが、幼い頃の僕はエスカレーターが好きで、両親が疲れた顔をして

いてもエレベーターを使うことなどなかったからこれらの記憶がない。実家に帰ってきてから今日まで見たもので、あの頃と変わらぬ雰囲気を残しているものは実家の近くにある同級生の親がやっていたクリーニング屋とお菓子の機械、そしてこのエレベーターぐらいだ。せつかくだし、帰りに回るお菓子の中から子供のころよく食べていたクッキーとゼリービーンズでも買っていいか。とはいえ、実際ネクタイとワイシャツを買うとどれくらいかかるのかもわからないから、お釣りがどれくらい残るかもわからない。それでも、昔ならそれこそ値段が一桁高いような紳士服ばかりここには売っていたのだろう。昔はデパ地下と呼ばれていたこの食品コーナーには今も多くの人がいるが、客も店員も雰囲気が違うのは気のせいではないはずだ。

この街、そしてうちの家族のように近郊に住む人間にとって、ここにかつてあった地上七階地下二階建ての百貨店に思い出がないことはまずないだろう。父親が、まるで自分の手柄かのようにこのデパートが完成してからこの街がいかに賑わっていったかを、開店の日に会社を半休して買ったという灰皿にマイルドセブンの灰を落としながら思い出話の一つとして何度も話していたことを思い出す。きつと父、いやあの時代にこの街を生きた人にとって、こ